

を述べらるること甚だ詳しい。蓋し本書は朝鮮史學界永遠の津梁として其の名は不朽であらう。「菊版、二四七頁、價、二・五〇圓。京城府長谷川町。振替京城三三四一番。近澤書店發行。京都寺町丸太町彙文堂書店取次（那波）」

○國學者谷川士清の研究

加藤 竹男著

著者多年師事せる西田博士は序文のうちにおいて、最初に醫を學び、後國學研究に入れる著者の經歷を顧み、本書の特質として、著者の郷土を同じうする先賢に對する敬慕の情と、更に科學的研究の精神とを注意せられたこの著者の態度は誠に本書を貫ぬき隨所に見出さるゝものであり、學問が直ちに人格の反映なること、讀後感において著しきものがある。

「谷川神社創立の思ひ出」に語らるゝ著者の生涯は、年少にして慈父より郷土の先賢、本居宣長を聞き、また谷川士清を知り、成年遊學の後は歸郷の度に宣長、士清につきて郷老と物語つた。斯かる裡に育かれた尊崇の念

は、更に士清の埋もれた功績を顯揚し、もつて現代文化の由るところを探らうとし、(三頁)また、士清神社建設の運動にまで至らしめた。然しこれは、たゞ盲目的なる郷土愛のみでない。そのよるところは、記録、文書につき博く資料を探り、また郷土における未知資料を多く得てその嚴密なる研鑽、自由なる驅使より來る論定である。隨處に見ゆる書紀通證、倭訓栞等其他の巧みなる利用、南朝雅錄の考證(四三―四七頁)醫學思想研究材料の紹介(七四頁)等々。然し、この説くところは忠實なる記述に止らず、士清の學問の特色とするところに及んだ。斯くすることは、廣き知見と深き洞察の後に成し得るものであり、何人も至難とするところ、著者は隨處にこれを試みた。中には彼の醫道における復古的傾向を神道思想において垂加流をうけつつ復古神道の先驅的立場をとるものと結びつけようとする鋭き考察もある。(百頁)

通卷拾壹編、士清の神道觀、國體思想觀、醫道觀よりこの學派、特に唐崎士愛との關係に及び、また本居宣長との學問的交流なる興味ある問題に觸てる。此等にあ

つては、士清は學者としてよりは、むしろ思想家として多く説明されてをり、従つて書紀通證、倭訓栞等を學術的勞作として考察することはなく、たゞ彼の思想理解のために引用せらるゝのみであるが、これは士清の學問傾向によると共にまた著者が彼の思想的息吹のもとにあるより來るものであらう。

本書において、斯く、士清の學問は特色あるものとして、種々方面より説かれてゐる。ひとつの特質を明らかにすると同時に他を見ることである。著者の國學研究が本書を基點としてよき展開を遂げらるるを期待すべきであらう。(東京湯川弘文社發行、菊二六一頁、挿繪三一圖、定價貳圓八拾錢)(藤)

○寺院經濟史研究 日本宗教史研究會編

我國の社會經濟史研究が隆盛になつてから最早や數年を経過してゐる。試みに本年度各大學の國史學科卒業論文を見てその一斑を窺ひ得る如く、國史學界に於いて所謂社會經濟史の研究論著は壓倒的優位を占めつゝある

現況である。而してこゝに、この方面の俊秀なる新進學徒によつて組織されてゐる日本宗教史研究會は、先にある研究の成果を世に問ひし第一輯に續いて、寺院經濟史に關するものを集録し、「日本宗教史研究第二輯」として公刊するに至つたのである。是亦斯界降運の波に乗ると共に益々その趨勢を進めるものであらう。

本書の内容を一瞥するに——竹内理三氏の「成功・榮爵考」は、そのサブタイトル「日本寺院經濟史の一節として」が示す如く、成功・及び榮爵を寺院經濟と關聯せしめ、幾多の事例を援引して之を究明してゐる。寶月圭吾氏の「中世興福寺領に於ける用水の統制」は、用水系統の地理的考察、用水統制の内容、用水統制の崩壞等の章に分ちて、庄園統制上重要な意味を有する用水統制權が、庄園領主たる興福寺の統制を離れて、次第に強力なる豪族の手に掌握されて行く過程を論じてゐる。中村吉治氏の「田地に神木を立てること」は、興福寺に於て領内農村を差押へる爲に神木を用ひた例を擧げて從來看却されてゐた神木の經濟史上有する意義を闡明し、並に點札と神